

知恵の樹

No. 213 2017.5.30

町田の図書館活動を
すすめる会

代表：手嶋 孝典
tejitaka@f8.dion.ne.jp

まちだ としょかんまつりに参画して

萩原 ^{たかし} 尚（おはなしグループ/チョコの会代表）

僕は一昨年、図書館の職員から「子どもまつりの反省会に参加してみませんか」と誘われ出席しました。初めは傍聴者気分でしたが、女性の実行委員のみなさんがそれぞれの想いを穏やかに話すのを聴いて、「女性のボランティア活動っていいな。女性は子どもへの想いを、肩ひじはらずに表現し、ひらひらと行動に移す」と思うようになっていました。すると「このおまつりは市民の希望でできたものです」という増山さんの言葉があって、僕はいっそう共感し、お手伝いしたいと、今年、実行委員会コアスタッフの仲間に入れてもらいました。でも体調をくずし、パフォーマンスの多くを見逃したのは残念ですが、数年前、2館で始まったというこのおまつりが、わずかのあいだに全館でやるようになり、たくさんの人たちが来てくれるようになったのは、ボランティアの人たちと図書館員たちが力を合わせてきたからだと思います。

そして同時に、「子どもたちよ、図書館に行けばきてきな兄ちゃん、姉ちゃん、おばちゃん、じいちゃんたちがいるよ。おもしろいことやっている。もっとたくさんのお子さんが図書館に行ってほしいな。僕の子どもの時代、子どもは心と体をつかって遊んだものだ。遊び友だちがいなければ探し歩いたものだ。今はスマホやゲームがあるから、友だちがいなくて困らないのかい？本を読むなんて、めんどくさいのかい？子どもにとって、本て何なの？お話をきくって何なの？」などと語りかけたくなりました。

数年前、僕が松本市の笹賀小学校で昔話を語り終わったときのことを思い出しました。一人の男の子が僕の片手を両手ではさみ、一言も発せず、表情も

変えず、長いあいだ僕の顔をじっと見つめたあと、手をそとはなして帰って行くという、ちょっと奇妙な体験をしました。翌年は同じ小学校の1年生たち100人ほど前に、自作の「うんこかつぎ名人」を語りましたが、このときは女の子の一人が「頭の中に絵がいっぱい！」と叫び、男の子の一人は駆けてきて僕の手をにぎり、何度もなんども上下にゆすりました。

無言、無表情だったあの男の子も、僕のお話を通して何かを感じたのでしょうか。じいさんというもの、人間というものに興味を持ったかもしれない。

今年の「としょかんまつり」の中央図書館では、学生の語る落語を聴きにたくさんの方が来ました。このことから、僕は落語を各図書館でやるのもいいのではないかと思って、子ども向けの落語を読んでみたのですが、読み物としてはそんなに面白いものではありませんでした。同じ言葉が何回も出てきたりして冗長。しかしこれが寄席にのぼるとおもしろい。落語家は口八丁手八丁、顔八丁で演じる。一方、僕らの読みきかせや語りは、心にしみる内容をしっかりと表現するというのがふつうの姿だから、僕らが百面相をつかって語ることはちょっと無理かな。落研の学生が各図書館で落語をやってくれれば、体の衰えた近所の年寄りも聴きにくる。年寄りには孫がいる。

僕は昔話は年寄りも喜ぶという体験をしました。あるとき「新ソバを食べる会」から昔話を語ってほしいと言われて、子ども相手のつもりで気楽に出かけていったところ、いろいろのある古民家にお年寄りが20人ほど集まっていました。新ソバを食べる会を子どもがやってるわけがない。キノコ採り名人が採ってきた

キノコがいっぱい入ったソバを楽しんだあと、僕は用意してきた話を急きょ安曇野弁にきり変えて語ったところ、これが受けたのでしょうか、たくさんの質問をもらいました。話の内容が爺さん婆さんたちの子ども時代の姿と重なる場所があったからでしょうか。年寄りでもお話を聴いて心がいやされたからでしょうか。

僕は、仮設住宅に閉じこもって出てこないお年寄りを励ますために、いっしょに食事作りをするという石巻市のグループに入れてもらったことがありました。お年寄りたちがぼそっ、ぼそっと語る津波の悲しい様子を聴きながら食事を作って食べたあと、僕はハーモニカで童謡、唱歌を吹いて、みなさんに歌って

もらい、民話も一つ語らせてもらいました。終わったあと、一組の老夫婦が寄ってきて、真剣な表情で話しかけてきました。これがみごとな漁師言葉で、僕にはまったくわからない。困った顔をしていたのでしょうか。近くにいた女性が察して翻訳をしてくれました。

「このお爺さんは元漁師で、津波で孫と家を流されてしまい、仮設住宅の中でしょんぼりしてきたが、あなたのハーモニカで歌い、昔話を聴いて涙がとまらなかった。いい気持ちだった。これからは外に出る、とおしゃっています」ということでした。

「としょかんまつり」が子どもから年寄りにまで広がっていくことを期待します。

講演会報告



どの本 読もうかな?!

2016年度児童書新刊本から

講師：広瀬恒子さん（親子読書地域文庫全国連絡会代表）

去る3月25日(土) 午後2時から、町田市民文学館大会議室において、広瀬恒子さんの講演会が当会の主催で開催され、32名の参加があった。なお、この講演会は、第6回まちだとしょかんまつりの「すすめる会」の企画として実施された。

はじめに

町田の図書館活動をすすめる会会報「知恵の樹」を毎号読んでいますが、住民が主体的に地域の図書館のよりよい発展に関心をもって持続した活動をしていることは、本当に根気のいる、草の根のすごい活動であると思う。

今年亡くなった児童文学作家の旅立ちの報道について、佐藤さとるとブルーナ、まついのりこが報道されたが、改めてミッフィーとブルーナの影響力が大きかった、幅広い読者を得たと実感した。ミッフィーは真っ黒な目でいつでも真正面を向いているウサギで、これ以上削れないシンプルな絵本なのに、世界中の子どもたちに愛された、その魅力というのは凄かったなど改めて思う。

しかし、私自身が子どもの本に関わることになったきっかけは、1959年に出版された佐藤さとるとの『だれも知らない小さな国』である。創作児童文学に触れた最初であり、大人の立場で読んでこういう子どもの本が日本でも作られるようになったんだと感じた。佐藤さとるとの『だれも知らない小さな国』を出した後、松谷みよ子の『たつのこたろう』、今江祥智の『山のむ

こうは青い海だった』と続々と創作児童文学が刊行された。80年代まで日本の創作児童文学はかなり発展的であったが、80年代以降90年代から様相が変わった。ただ、日本の子どもの本の歴史で、佐藤さとるとは創作児童文学の夜明けを作った、そうした作家だったという思いを新たに、思い返した。まついのりこは、独特なシンプルな絵を描いていた。なかなか気骨のある女性で、一貫して、社会問題にも積極的に関わった絵本作家だった。

1. 子ども本の消長について

大人の本ではベストセラーの消長は早いですが、それが子どもの本に移ってきているのではないかと、2、3年前の本でも存在感を持たなくなっている。その点で、ロアルド・ダール生誕100年に「古典」とは何なのかと考えたい。100年イギリスの子どもたちに愛され続ける作品は、『チョコレート工場の秘密』『マチルダは小さな大天才』のように子どもの興味関心を巧みに取り上げながら、ファンタジックにしかしブラックユーモアもあり、ストーリーの魅力や子どもをあっと驚かせるような作風が魅力ではないか。

2. 2016年の子どもの本の出版動向

『子どもと読書』編集部調査によれば、新刊児童書総点数 3,608 点(前年 3,480 点)、「語学」112 点(前年 43 点)「絵本」1,040 点「文学」762 点(単行本 850 点/文庫新書 294 点)であり、絵本と文学が大半を占めるが、特記すべきは、「語学」分野の出版増加でこれは文科省の外国語教育が小学校に入ってきた影響であろう。

3. 絵本

ノンフィクション分野での出版が健闘している。科学の成果を細密画や写真で示し、伝える本づくりが目立つ。『つちはんみょう』(偕成社)は、生態を大きく、見やすく描いているが、こどもがそれを実際の大きさと理解してしまう課題もある。『かえるふくしま』(ポプラ社)は、福島に生息するカエルの姿を伝えるも原子力発電所の汚染がカエルも無関係ではないことから、生きものとの関連に気づかされる。シリアのアレッポで戦闘に巻き込まれ亡くなった山本美香さん最後の仕事である『これから戦場に向かいます』(ポプラ社)は、彼女の思いを彼女の残した写真を通して感じながら読む本。

それに対して、ストーリー絵本では、お話としての面白さのある作品が少ない。『くいしんぼうシマウマ』(西村書店)は、1980 年代に出たものだが、2016 年に再刊。シマウマが今のような縞模様になったわけを述べるアフリカの民話。絵の面白さとストーリー性がある。ストーリー性のあるものは、昔話を元にしている場合が多いのではないかと。

死について触れたものに『ソーニャのめんどり』(くもん出版)が出た。主人公ソーニャが可愛がっている雌鶏が、狐に襲われるという事件から、悲しみに暮れるソーニャに父親が狐にもこどもがいて、育てなければならないことを語りかけながら、命の輪廻を考えさせる本。

『だちょうさんのたまご』(ひさかたチャイルド)は、ダチョウの孵化をめぐるコミカルなストーリー。『そらとぶそりとねこのタビー』(徳間書店)は、クリスマス時期に出た本。サンタとねこのコミカルな物語。怖いことをテーマにした『こわい、こわい、こわい?』(西村書店)は、主人公のネズミにとっての怖いものを主題に、怖いという感情を個々の生き物がどの様に感じているかを考えさせる。

『北極の宝もの』(あすなろ書房)は、北極に住む人々の楽しみにするオーロラの日をテーマに描く。『いもさいぼん』(講談社)は、さつまいもを育てるおじいさんとそれをとる動物たちの間における、どっちが泥棒かという話。答えは読み手に任される。『こうさぎとほしのどうくつ』(のら書店)は、洞窟に入ったウサギたちの後について星が洞窟にはいつてきたというユニークな発想の本。絵と本がマッチしているので取り上げた。『きょうはそらにまるいつき』(偕成社)は、空に浮かぶ月をいろんなところでいろんな人が見ているという絵本。読者の遊び心で遊ぶ本。

4. 読みもの

日本の場合、幼年童話が不振。絵本でまとめてしまっている傾向がある。幼年文学の難しさは、非常にシンプルなことばでストーリーを組み立てて子どもに伝えなければならない点にあり、絵の力を借りているのが殆どであり、インパクトを与えるものが無い。絵本で間に合っているのが現状ではないか。その中で、朽木祥『まんげつの夜、どかんねこのあしがいっぽん』(小学館)は、ユーモアあふれる本。どうってことない可笑しみが魅力である。幼年期の文学にはストーリー性が大切であるが、簡単なことばで伝えることは難しく、既存の作品を超えることは難しいのが現実だろう。



子どもたちに人気のあったものに「おしりたんてい」シリーズがある。読み物、絵本、ビデオで出ており、このような本づくりはあまりなかったように思うが、子どもには人気があった。

小学校高学年あたりでは、こどもにとって身近な社会は学校であり、その友だちの中での自分の位置は関心事であり、それをテーマにした作品も多い。斉藤洋はその点で多くの作品を出した。藤重ヒカル『日小見不思議草紙』(偕成社)は、時代劇の舞台を借りて現代に引き付けた話。現代は自分の存在を友達の中で、どんな風に納得いく形で位置付けていけるかが困難になっているのであろう。その微妙でデリケートな心理をテーマにしたものに、工藤純子『セカイの空がみえるまち』(講談社)は、新大久保のコリアンタウンを舞台に描いた本。千葉朋代『さくら坂』(小峰書

店)は、将来に積極的な女子高生が、大病のため片足切断の不遇にあい、それを巡る精神的葛藤からどうやって生きる意欲を見出したかをオーソドックスに描いた本。子どもにエールを送る本であろう。『駅鈴(はゆまのすず)』(くもん出版)は、奈良時代の駅伝制度を舞台に、「駅使」の道案内や世話をする「駅子」になることを夢見る女の子の話。奈良時代の「駅伝制」を探るような興味ある本。

日本における戦争と平和を伝える本としては、加害者としての戦争、被害者としての戦争など書かれてきたが、新しい戦争文学として、日本の被害と侵略の双方から描かれるべきとして『新しい長編戦争児童文学』シリーズが出た。戦争はなぜおこるのか、その答えを経済に求めたのが濱野京子であり、興味深い。中村真里子『金色の流れの中で』(新日本出版社)は、侵略戦争の当事者の娘としての葛藤を描いた作品。



中村は新人であり、これがデビュー作、今後に期待したい。今関信子『大久野島からのバトン』(新日本出版社)は、大久野島にて戦時中に極秘に毒ガスを作っていたその当事者に取材して、その実態を描き出した労作。

池田ゆみる『坂の上の図書館』(さえら書房)は家庭環境に恵まれない少女が図書館に通うことで司書との関りで自分の重い心が開かれることを描く読書推進向けの本。いとうみく『アポリアーあしたの風』(童心社)は大津波で母親を助けられなかった少年の苦悩を人との出会いで乗り越えていくまでを描く、評価の分れた本。岡田淳『きかせたがりやの魔女』(偕成社)は、主人公の学校にいる魔女が色々な話をしてくれるというストーリー。

海外の作品で幼年ものには、主人公に個性があり、ストーリー性があるそれなりに面白いものが多かった。グードルン・メプス『世界一の三人きょうだい』(徳間書店)は、両親が出かけるため一人暮らしをしている大学生の兄のアパートで一週間を暮らすことになった幼い子どもたちが、大学に行ったり、コインランドリーに行ったり、初めての普段とは違う体験を楽しむ。ダイアナ・ウィン・ジョーズ『四人のおばあちゃん』(徳間書店)は、両親の出張のため、子守に四人の祖母がやってきて色々な事件が起きる。四人のおばあ

ちゃんの個性の描き分けが上手。ルイス・スロボドキン『カルペパー一家のおはなし』(瑞雲社)は、主人公が紙人形。その目線からみた人間を描く素材の面白さがある。エレナー・エスティス『ゆうかな猫 ミランダ』(岩波書店)は、ローマ時代の町を舞台に、火事に焼き出されたみなしご猫をまとめて面倒見る賢い猫のミランダの活躍。健康な、小学校低学年でも楽しめる作品。ケイト・ディカミロ『愛をみつけたうさぎ』(ポプラ社)は再刊。非常に誇り高い飾り物の陶器のうさぎが、放浪するなかで色々な人間に会って、人間の愛を知る話。文学作品としても完成度が高い。

5. 子どもの本の参考資料から

昨年、子どもの本に関わる人には参考になる本がいっぱいあった。さくまゆみこ他『明日の平和をさがす本—戦争と平和を考える絵本からYAまで 300』(岩崎書店)は、戦争と平和に関わる本を絵本からYAまで300冊をセレクト。佐藤英和『絵本に魅せられて』(こぐま社)は、こぐま社創業者の佐藤英和によるどの様な思いで会社を興し絵本を作ってきたかを述べる絵本論。因みに昨年はこぐま社創立40周年。石井正己編『昔話を語り継ぎたい人に』(三弥井書店)は、昔話の力や語り手の実践を多く載せる。片岡輝『人はなぜ語るのか』(アイ企画)は、語るの意味から論じる本。いずれも参考になる必読書であろう。

『ファンタジーとアニメーション 古田足日「子どもと文化」の継承と発展』(童心社)は、古田足日の子ども文化論を、汐見稔幸らが分析論述する。石子順『漫画は戦争を忘れない』(新日本出版社)は、漫画家たちがどの様に戦争を描いてきたかを論じる労作。

6. これからに向けて

これからに向けての問題として、子どもと本を繋ぐ活動をしていて様々なところで出会う子どもが低年齢化しており、小学校高学年の子どもに出会う機会が少なくなっている。青少年教育機構の調査結果では注目すべき結果が出た。中学生や高校生の地域の図書館、学校図書館の利用調査を行ったところ、7割が使っていないという。秋田喜代美氏は、その調査結果の分析で、「学校内での個人差よりも、学校間差が公立中学校間でも大きいことがはっきりした」「どの学校に通うかで、本の出合いの良質な経験ができるかどうか、決まってくる」(『子どもと読書』2016年

11・12月号より)ということ報告している。自分たちの足元の最も身近な中学がどのような環境であるかが、問題であることをデータで裏付けられた。

この状況を受けて、子どもと本を結びつける活動で私たちが願う、その根底にあるものは何か。子どもたちに何を伝えていくべきであろうか。宮崎駿が言うように人間が社会で生きる価値、「この世は生きるに値する」ということが子どもに伝えるべきメッセージであろう。大人と子どものボーダレスの中で、児童文学の児童をとってもよいのではないかという人もいるが、児童文学の独自性を保つべき文化はあってよいと思う。では、「児童」の冠をつける意味やメッセージは何か。大人の小説と何が違うのか。「児童」という冠のもと、大人たちは何をメッセージとして伝えたいのか、

それは「この世は生きるに値する」ということであり、これを本の世界でどの様に見えるかを期待したい。

7. 終わりに

アントニオ・G・イトゥルベ『アウシュヴィッツの図書係』(集英社)は、多くの人が読んだと思う。主人公のディタは、ナチスのユダヤ人収容所における非人間的な生活の中で、読書を通して、心は自由に色々な国に旅することができ、楽しいお話からユーモアを感じることができたという。本がこの少女の生きる支えになっていたことを読み取ったときに、改めて本の力を感じさせられた。2016年を振り返りながら、児童文学の独自性、「生きるに値する作品」を期待していきたい。 記録・文責:山口洋(会員)

報告 市民が考える町田の行財政 その2

『公共施設等総合管理計画』—市民生活にもたらす影響は?—

講師：伊藤久雄さん(認定NPO法人まちぼつと理事)

5月23日(火)午後6時から8時まで、町田市立中央図書館のホールで、まちだ自治研究センターと当会の共催による学習会が43名の参加により開催された。講師の伊藤さんがレジュメに付けたタイトルは、「町田市公共施設等管理計画の課題—多摩26市との比較もふくめて」である。講演内容は、「1 多摩26市の公共施設等管理計画の策定状況と特徴について」「2 八王子市、三鷹市、調布市、多摩市の公共施設等管理計画」「3 町田市公共施設等管理計画(基本計画)の特徴と課題」についてだった。

分かりやすく、丁寧に作られたレジュメと町田市公共施設等総合管理計画(基本計画)概要版、「施設機能ごとの方向性」を一覧にしたものを資料に用い、解説して頂いた。特に、八王子市、三鷹市、調布市、多摩市の公共施設等管理計画は、各市の状況がよく分かり、町田市の「施設機能ごとの方向性」が偏ったものであることも理解することができた。参加者からの感想等を以下に掲載する(講演の詳細は、次号に掲載予定)。

「市民が考える町田の行財政その2」に参加して 鈴木真佐世

1. 伊藤さんの話や資料から、今回の町田市の計画が平成25年度に国土交通省が「インフラ長寿命化基本計画」、総務省が「公共施設等総合管理計画」等の公共施設マネジメントに係る方針を公表したことから出発していること、その名称や期間や対象施設は少しずつ異なっているけれども全国、そして多摩地域の各市町村も人口減少、高齢化、税収減、施設の老朽化の問題を抱えており、どこも皆管理計画を策定していることなどがよくわかりました。
2. 多摩地域の手法の比較表を見ると、安全確保、

耐震化、長寿命化、再編・統合・廃止、体制の構築などという点はほとんどの市に共通だが、PPP/PFTの導入を挙げているところはそう多くない。その中で町田市はほとんどすべての施設機能ごとの方向性に、PPP/PFIの導入の検討を挙げている。これは大きな問題である。伊藤さんが、都の市場問題がスムーズに進まないのは、都が多くの部分を民間に委託してしまっていて、都庁の中が空洞化しているためだと指摘していらしたが、市の場合も同じことで、施設管理などにはPPP/PFIの手法も否定しないが、施設と機能をひとくくりで扱って、この手法を機能にまで導入して何年もたてば、役所の中でその機能が

空洞化して、肝心なことは職員がわからなくなってしまうことが危惧される。建物が老朽化しているからといって、その機能の価値を無視することがないようにしていただきたいと思った。

3. 「町田市公共施設等総合管理計画」には、「今後も継続して市民や議会への十分な情報提供を行うことで現状や課題を市民等と共有し、対話や協議の

場を通じて、多くの理解が得られる丁寧な合意形成を行います。計画の推進においても、市民や企業等が主体となって積極的に参画するしくみの構築を目指します」(概要版 11 頁)と書かれているので、ぜひ言葉だけでなく、市民等との話し合いの内容が活かされるような進め方をしてほしい。(会員)

第 16 期図書館協議会 第 16 回定例会報告

2017 年 4 月 24 日(月)午前 9:30~11:30 中央図書館・中集会室 傍聴者なし

中村生涯学習部長 新任あいさつ

【報告事項】

《館長報告》

1. 人事異動について

職員:転出 10 名・退職3名(内1名再任用退職)、
転入 14 名(内2名再任用) 館内異動8名

嘱託員:主任嘱託員新規1名 退職:4名 異動:
14 名、新規採用:3名 (10 月に 1 名増)

Q:例年に比べて異動が多いように思うが業務に支障はないか。⇒4、5月は大変な面もあるが、新しい風を入れるということでは意味があると思っている。

Q:図書館は専門性の高い職場なので、新しい方には研修費を使って司書資格を取っていただきたい。⇒10 年くらい前までは司書講習受講費があったが、受ける人が出ないことが続いたこともあり、現在では研修としてはなくなっている。ただ、個人的に受講し資格を取得している職員もいる。

2. 平成 29 年第 1 回町田市議会定例会

文教社会常委員会2月 24 日 減額の補正予算を提出し承認された。

文教社会常任委員会3月 16 日 一般会計予算

3. 定例教育委員会

第 12 回 3月 14 日

報告

(1)第 6 回「まちだとしょかんまつり」の開催について

委員から:今年初めておこなった、たからじまを開放しておはなし会は親子連れで気軽に参加できたようでとても喜ばれた。

(2)「本の雑誌」厄よけ展—オモシロ本を求めて 42 年」の開催について

(3)堺市民センター設備工事に伴う堺図書館の休館について

建物の老朽化に伴う設備工事を 9 月~3 月末に実施するため。行政窓口のみ営業。

堺図書館は移動図書館と予約資料の受け渡しのみになる見込み(3ヶ月程度)

Q:3ヶ月以外は移動図書館も稼働できないのか。
⇒本の積み込み、データの落とし込み、職員の居場所などの面で困難。他の図書館の協力を得ても3ヶ月が限界かと。

Q:図書館全体で堺図書館に 1 冊しかない本は貸出ができなくなるのか⇒そのような本がどのくらいあるかうまく調べられれば、対応できるが今は把握していない。

第 1 回 4月 14 日

議案

(1)町田市子ども読書活動推進計画推進会議委員の委嘱等及び解任 3 名解任 2 名委嘱

Q:小学校の PTA 選出の委員は今年度も欠員のままか。⇒小学校は PTA からの推薦は難しいので検討中。

委員から:公募なども視野に入れ小学校の保護者の意見も反映できるように配慮を。

報告

(1)第 6 回「まちだとしょかんまつり」の実施報告について

参加団体の増加、大学生の参加、入場者の増加と大成功。

Q:参加人数が 500 人増えたことの要因は。⇒要因は限定できないが、今年から行われた保育系の学生の作品展示などはとても人気だった。

(2)「今後 10 年の町田市民文学館のあり方について(答申)」について

Q:この答申は5ヵ年計画に反映されるのか。⇒5ヵ年計画の存廃の決定が優先。存続と決まった時に反映される。

(3)開館 10 周年記念「野田宇太郎 散歩の楽しみくパンの会」から文学散歩まで」展の実施

1月 20 日～3月 21 日の会期に約 3,700 人の観覧者。

4. その他

(1)講演会『「ティツィアーノとヴェネツィア派展」のみどころ』3月8日

和光大学ポプリホールにて 270 人参加

Q:図書館独自の講演会の予定はあるか。⇒講演会ではないが中高生向けのワークショップを検討中。

Q:ビブリオバトルを図書館主催ですという話はどうなっているか。⇒話は出ているが、まだこれから。

委員から:和光大学には声が掛からなかったの
で、参加できなかったが、としょかんまつりを見に行
った教員からは、次年度協力ができることがあ
れば協力したいと報告を受けている。また、野田
宇太郎展の文学散歩に協力した教員からは学生
にとって良い勉強になったと報告された。

(2)“ちびヒロ” 3月 15 日 市民フォーラム前
おはなし会 4 組親子参加。

産業観光課の実証実験に協力。

(3)第6回としょかんまつり

(4)2017 年度の予算について

2016 年度に比べると生涯学習部の予算は
3,437 万円減額、図書館費も 3,477 万円減額。

図書館費の減額の理由:16 年度は防水修繕
費、システム改修費があったが 17 年度にはない
ので。

資料費では図書費が 214 万円増、雑誌が 33
万円増。

Q:システム改修にはどのくらいの費用が掛か
ったのか。⇒MARC の変更のためのフル改修
をすると 2,000 万円ほどかかるが部分改修で
対応したのでその半分くらいだったと思う。

Q:今後 JAPAN/MARC を利用することも検討

されているか。⇒タイムラグが解消されれば必ず
検討する必要があると考えている。

○PR について

・ツイッターが始まったが、今後内容頻度なども検討
し、利用者へ情報発信ツールとして活用していただ
きたい。

・広報に図書館が特集されていたが。⇒移動図書
館カレンダーが掲載されなくなるので、移動図書館
を記事にして欲しいと要望した結果だと思う。

・図書館が取り上げられるのはうれしいことだ。館長
の顔写真やコメントを掲示したり、図書館だよりに載
せたりするなどして、館長や職員と市民との距離を
狭めるのもよいのでは。

《委員長報告》

1.第6回町田市生涯学習審議会 3月 27 日

会議の進め方:公共施設再編計画の検討に合
わせて、生涯学習審議会の進め方を再調整する
ことに。

公共施設再編計画会議の動向について、生涯
学習課の担当者から資料の提示と議論の経過に
ついての報告があった。

生涯学習の公共性と行政が持つ文化的価値を
守る機能を忘れてはいけないという意見も。

市民協働という名のもとになにもかもボラン
ティアに頼りすぎ、ボランティアをつぶしてしまう危
険性を危惧。

学校図書館の地域開放を考えるなら、それな
りの環境整備が不可欠。今のままでは無理。

【協議事項】

1. 図書館評価について

図書館評価に対する図書館の見解は頂けるのか
⇒図書館の考えも合わせてまとめる。

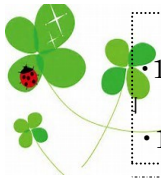
2. 今後の活動について

・図書館評価自体に対する課題、改善点につい
ても今後この場で話し合いたい。

・16 期のまとめとして、図書館への要望につ
いて論議する。

・図書館協議会ハンドブックの制作について

★第 16 期図書館協議会第 17 回定例会は、2017
年5月 22 日(月)9:30～ 町田市立中央図書館中集
会室にて開催された(次号で報告予定)。



例会 4/25 (火) 報告

- ・16:30～№212 印刷他(清水・多田・手嶋・丸岡)
- ・18:00～20:20 中央図書館・中集会室

出席: 飯野・石井・兼田・久保・駒田・齋藤・清水・多田・手嶋・増山・丸岡・守谷

議題

1. 会報について

№213: 巻頭言「まちだとしょかんまつりに参画して」(萩原尚さん/おはなしグループ/チョコの会代表) 広瀬恒子さん講演会の報告(山口)他

2. すずめる会のリーフレットの改訂について

増山、高橋が引き続き担当し、検討する。

3. 今年度の世話人について

未確定部分があるため、割愛(次号掲載予定)。

4. 今年度の活動計画について

・「町田市5ヵ年計画 17-21」、「町田市公共施設等総合管理計画」への対応

4/27(木)午後 6:00～市民フォーラム4Fにて「すずめる会」有志他による生涯学習施設・社会教育施設の今後を話し合う会「考えてみませんか!」を開催。

5/23(火)午後 6:00～議題5. 参照。

⇒ 今後の取り組みについては継続。

・図書館見学会

⇒ 候補があれば、その都度挙げて検討する。

・その他

⇒ 今年度の定例会の開催日時は、第4火曜日午後 6:00～。

5. 町田市の財政分析について

テーマ: 市民が考える町田の行財政 その2『公共施設総合管理計画』—市民生活にもたらす影響は?—

日時: 2017年5月23日(火)午後 6:00～8:00

会場: 町田市立中央図書館6階ホール

内容: 『公共施設等総合管理計画』から見えてくる課題・他市の状況など

講師: 伊藤久雄さん(東京自治研究センター理事・NPO 法人「まちぽっと」理事)

主催: まちだ自治研究センター/「すずめる会」

6. 「町田市5ヵ年計画 17-21」について

⇒ 議題4. 参照。

7. 図書指導員謝礼の金額変更について

「知恵の樹」№212 P3参照。

今年度無資格者の謝礼金が 2,500 円から 3,000 円へ増額で、一昨年度の金額に回復。有資格者は 3,500 円据置きとなり、資格の有無による格差が問題であるという指摘は反映されなかった。昨年度の変更により辞める方も多く人員確保が難しかった模様。

8. 図書館まつりの反省について

「知恵の樹」№212 P6, 7参照。

9. 図友連要望書(文部科学大臣、総務大臣宛て)案について

各要望書案(確定版)をもって「すずめる会」も賛同団体として名を連ねることが承認された。

10. 5月例会の日程変更について

5月30日(火)に変更し、開催したい。⇒承認。

報告

1. 町田市公共施設再編計画策定検討委員会報告

図書館が公共サービスでなければならない理由、存在意義を具体的に考えていく必要がある。

2. 団体及び個人からの報告

- ・嘱託労: 定期大会 6/8(木)午後 6:30～開催。
- ・としょかんまつり: 「第7回まちだとしょかんまつり」説明会 6/20(火)午後 2時～4時。
- ・まちだ語り手の会: 5/30(火)第七期下半期総会開催。
- ・図書館六分会協議会: 4/28(金)分会長会議。6月の職場要求に向けて要求内容検討中。今回司書資格を有する職員が希望していないにも関わらず本庁への異動が多かった。今後毎年2～3名ずつ退職していくが、今までの積み重ねてきた知識等を引き継ぐことができなくなることを懸念している旨を伝え、希望者は図書館に異動できるよう要望する予定。また引き続き資料費の増額も訴えていく。

・野津田・雑木林の会: 野津田公園のバラ広場をテニスコート 12 面に変更する計画が出ている。

隣接地には照明付のグラウンドを作る計画だが、地権者の一人の農家さんは「農業を続けたい」と土地売却に応じていない。市民意見で計画反対の意見が 17 件出たが、都市計画審議会で承認。